

地獄へ行った少年

ドイツ

昔むかし、あるところに、ひとりの少年がいました。この子には、お父さんもお母さんもいませんでした。世話をしてくれる人がだれもいなかったので、ぼろぼろの服を着て、いつもお腹を空かせていました。

あるとき、少年は村を出て、どこまでもどこまでも歩いて行きました。しまいに大きな森に入ってしまった。どこまで行っても家もなく、だれにも会いませんでした。鳥たちもだまりこんでいました。少年はすっかり悲しくなっておいおい泣きだしました。そのとき、とつぜん、上品な身なりの男の人があらわれました。男の人は、少年に、「どうしてそんなに泣いているんだね」とききました。

「だって、お父さんもお母さんも死んでしまったし、だれもぼくの世話をしてくれない。食べる物も着る物もないんだ」と、少年が答えると、男の人は、いいました。

「そんなことなら、わたしといっしょにおいで。わたしの所ではたらかせてあげよう」少年は男の人について行きました。森の中を何時間も歩いて、ようやく大きな陰気くさい家に着きました。男の人は、少年を中へ入れて、食べ物や飲み物をたっぷり出してくれました。少年がお腹いっぱいになると、男の人は、かかとが鉄でできている靴をくれています。

「このかかとがすりへるまで、ここではたらくんだよ。でも、おまえの仕事は簡単だ。あそこの大なべの下の火を、いつもよく燃やすことだけだ。ただし、けっして大なべの中をのぞいてはいけない。ちゃんと仕事をしてくれたら、うんと給料をやるからな」

少年は、約束どおりはたらきました。

何年もたったある日のこと、少年は、大なべの中を見たくてたまらなくなりました。そこで、用心深く、大なべのふたを持ち上げてみました。するとまあ、大なべの中には、少年のなくなったおばあさんがいたのです。おばあさんはいいました。

「ぼうや、おまえは自分がどこにいるのか、分かっているのかい」

「いいえ。ぼくはどこにいるの」

「おまえがいるのは地獄だよ。そして、おまえのご主人は悪魔なんだよ。わたしのいうことをよくお聞き。やすりを探してきておまえの靴のかかとをすりへらすんだ。それで、給料をはらってくれようとしたら、金貨や銀貨をくれても三クロイツァーしか受け取っ

ちやいけないよ。そして、背中を見せないであとずさりしながら地獄から出て行くんだ」
おばあさんは、そういつて、少年がうまく逃げ出せるように、無事を祈ってくれました。それから、

「大なべの下の火をあまり強く燃やすと、わたしは苦しうてしようがないから、ほどほどにしておいてくれよ」とたのみました。

少年は、大なべの火を小さくしてから、やすりを探しました。やっとやすりを見つけると、靴のかかところがなくなるまでこすりました。それから悪魔の所に行つて、いいました。

「ぼくの靴のかかところがすりへりました。くにに帰らせてください」

悪魔は、靴のかかとを調べると、少年をテーブルのところに連れて行きました。テーブルには、お金が山と積まれていました。

「おまえの給料はここにあるぞ。いくらでも持てるだけ持つて帰るといい」と悪魔はいました。少年は、三クロイツァーだけ取ると、そのまま背中を見せないようにあとずさりして、地獄から出て行きました。悪魔は、恐ろしい顔で笑いながらいいました。

「おまえのばあさんの入れ知恵だな」

悪魔は、少年をつかまえることができませんでした。

少年は、どんどん歩いていつて、とうとう森からぬけだしました。すると、道ばたに、男の人がひとりしゃがみこんでいました。男の人は、みじめで貧しそうでした。

「何か食べる物をめぐんでくれないか」と、男の人はたのみました。

「三クロイツァーしか持つてないんだけど、それでよかったらあんたにあげるよ」

少年がお金をさし出すと、男の人は立ち上がつて、

「わたしは神なんだよ。おまえに願ひ事を三つかなえあげよう」といいました。少年は、ちよつと考えていいました。

「撃てばかならず命中する鉄砲と、命令すると何でも飛びこんで来る背負いぶくろと、だれでもおどらせるヴァイオリンをください」

たちまち、鉄砲とぶくろとヴァイオリンが目の前にあらわれました。少年はお礼をいつてすぐにかけて出そうとしました。ところが、いちばん大切なものをお願いするのをわすれているのに気づきました。そこで、ふりかえつて、

「あつ、永遠の心のしあわせをお願いすればよかったなあ」とさげびました。神さまは

わらいながら、

「おまえは心がやさしいから、それはおまけにあげることにしよう」といいました。少年は、もういちどお札をいって、旅をつづけました。

まもなく、女の人がふたり、大きなごを背負って歩いているのに会いました。ひとりのかごには、せとものがいっぱい入っていて、もうひとりのかごには、たまごがいっぱい入っていました。少年は、

「ねえ、おばさんたち、ぼく、お腹がぺこぺこです。どうかおわんをひとつとたまごをふたつもらえませんか？」とたのみました。

女の人たちは、怒ってどなりだしました。

「なんだって、おまえみたいな子にめぐんでやらないといけないんだ。そんなこといってないで、せつせとはたらくんだよ」

少年は、ヴァイオリンを取り出してひき始めました。たちまち、女の人たちはおどりはじめました。ふたりは飛んだりねたりしておどり回り、とうとうせとものもたまごも、ぜんぶこわれてしまいました。

少年は旅を続けました。すると、りっぱな身なりの学校の先生に会いました。少年は、「ねえ、あそこの垣根に鳥がたくさんとまっているでしょう。ぼくが一発撃ったら、ぜんぶいばらの垣根の中に落ちるんだよ」といいました。先生は、怒って、

「そんなことできるはずがない。ばかな子だ」といいました。

「できるさ」と、少年はさけびました。そして、

「落ちた鳥をぜんぶひろっておくれよ」といいました。

少年が鉄砲を撃つと、鳥がぜんぶいばらの垣根の中に落ちました。先生は、鳥をぜんぶひろい集めました。いばらのとげで、服がずたずたに破れてしまいました。

少年は旅を続けました。すると、今度は、お金持ちの商人に会いました。商人は、腰に巻いてある革帯の中に、お金をぎっしり詰めこんでいました。少年は、

「ぼくに、三クロイツァーでいいからくれませんか」といいました。商人は怒って、「なんだと。なんでおまえに三クロイツァーやらなきやならんのだ。おまえなんかにや、つめのあかだつてやるもんか」とどなりました。少年は、

「ぼくのふくろに入れ」とさけびました。商人は、あつというまに少年の背負いぶくろの中に入りました。そして、出してもらうのに、けっきょく三クロイツァーやらなくて

はなりませんでした。

さて、ふたりの女の人と先生と商人は、裁判官さいばんかんのところへかけこんで、「あの少年はまほう使いだ」とうったえました。裁判官は、少年に死刑しけいの判決はんけつをくだしました。

少年は、死刑台しけいだいに連れていかれるとき、裁判官にいました。

「どうか、最後の望みのぞをかなえてください。わたしのヴァイオリンと背負いぶくろを見せてください。もう一度さわってみたいのです」

裁判官は、少年にヴァイオリンと背負いぶくろをわたしてやりました。少年は、ヴァイオリンをひき始めました。たちまち、みんながおどりました。裁判官もふたりの女も先生も商人も、町の人たちも、一生懸命いっしょうけんめい、おどったり、はねたりしました。みんな息もたええです。

少年は、背負いぶくろを手にとり取って、

「ぼくのふくろに入れ」とさげびました。すると、裁判官もふたりの女も先生も商人も、ふくろの中にとびこんでしまいました。

「出してくれ。出してくれ。お願いだから出してくれ」と、みんなは泣きさげびました。

少年は、

「じゃあ、もうぼくの旅のじやまはしないかい」といいました。

「しない、しない。けっしてじやましない」

みんなが約束したので、少年はふくろから出してやりました。

こうして、少年は旅をつづけました。そして、せっせとはたらいて、りっぱな大人おとなになりました。死んでからは天国てんごくへ行くことができましたとさ。

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小沢俊夫編訳／ぎょうせい